

平成21年 5月28日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19720043
 研究課題名(和文) 大衆少年雑誌における暴力表象にみるジェンダーの形成に関する歴史社会学的研究
 研究課題名(英文) Historical and Sociological Study on the Formation of Gender in Popular Magazines for Children: Attention to the Violent Representation
 研究代表者
 目黒 強(MEGURO TSUYOSHI)
 神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授
 研究者番号：70346229

研究成果の概要：本研究では、大衆少年雑誌における暴力行動の描写場面の分析を通して、ジェンダーが少年読者にどのように提示されたのかを明らかにしようと試みた。大衆少年雑誌としては大正期を代表する雑誌である『日本少年』を取り上げ、ジャンル小説を分析対象とした。その結果、「冒険小説」・「滑稽小説」・「立志小説」というジャンル小説において、それぞれのジャンルに固有の暴力行動の描写および少年像が提示されていることが明らかとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	150,000	1,150,000

研究分野：児童文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近代文学・児童文学・少年雑誌・ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

(1) 着想の経緯

これまで申請者は、児童文学における男性像について、国民国家において期待される男性像と学歴社会において期待される男性像の2つの観点から研究を進めてきた。近年、近代日本において構築された不良少年像を検討するなかで、男性像が提示されるにあたって、広義の暴力表象が重要な機能を果たしていることに気がついた。

そこで、これまでの研究を発展させるべく、本研究課題を設定するに至った。

(2) 研究計画の背景

現代社会のように情報源が多くなかった近代にあって、雑誌メディアは主要な情報源であるのみならず、読者の価値観の形成に少なからず影響を及ぼしたと考えられる。

大衆少年雑誌は、少年読者を教導する傾向を有しており、雑誌メディアが読者の価値観の形成に及ぼす影響を検証するにあたって、好適な研究対象であると考えた。

児童文学研究における少年雑誌研究とジェンダー研究については、前者では大衆少年雑誌が検討されているとは言い難く、後者では女性性に比して男性性のジェンダー形成

の検討は少ない。

そこで、本研究では、大衆少年雑誌を取り上げ、雑誌メディアが少年読者のジェンダーの形成に及ぼす影響の一端を解明したいと考えるに至った。

2. 研究の目的

明治・大正期における少年雑誌は、少年読者に期待されたジェンダーを提示する傾向にあった。とりわけ、大衆少年雑誌は、ジェンダー規範の提示に積極的であったと思われる。

そこで、本研究では、大衆少年雑誌における少年読者のジェンダー形成に着目し、大衆少年雑誌が少年読者の価値観の形成に及ぼす影響の一端を明らかにしたいと考えた。

3. 研究の方法

(1) 研究対象について

本研究では、大衆少年雑誌として『日本少年』（実業之日本社、1904～1938）を取り上げた。

『日本少年』は、大正中期における発行部数が20万部を超えたといわれていることから、当時を代表する大衆少年雑誌であるといえることができる。

以上のことから、『日本少年』は、少年読者に提示されたジェンダー表象を検討するという本研究にとって、格好のデータを提供する雑誌であると考えた。

(2) 分析の観点について

① ジャンル小説

『日本少年』を分析するにあたって、本誌に掲載されたジャンル小説に着目することとした。ジャンル小説では、登場人物像やストーリーなどがパターン化されていると考えられるからである。なお、当時の雑誌メディアにおける挿絵に対する読者の関心の高さを考慮し、物語内容のみならず、挿絵についても分析を加えることとする。

ジャンル小説を指標とすることで、『日本少年』におけるジェンダー表象の傾向が明らかになることが期待される。

② 暴力表象

ジャンル小説の内容分析を遂行するにあたって、ジャンル小説のコードの一つとして機能していると考えられる暴力表象に着目することとした。

ここにいう暴力表象とは、身体的暴力から言語的暴力、ひいては心理的暴力に至るまでの広義の暴力行動に関する描写全般を指すものとする。

暴力表象に着目することで、ジャンル小説における少年像が明らかにできると考えた。

③ 読者関連記事

『日本少年』は読者参加型企画を試みるなど、編集者と読者、読者と読者との交流を重視していた雑誌である。そこで、読者関連記事を取り上げ、ジャンル小説に対する読者の反響や読者のジェンダー観などを明らかにできればと考えた。

(3) 暴力表象の類型化について

ジャンル小説における少年像を解明するにあたって、まずは暴力表象を類型化した。

① 暴力行動の種類

暴力行動の種類については、身体的暴力を「直接的暴力」とし、言語的暴力と心理的暴食を「間接的暴力」として大別した。

② 暴力行動の指向性

さらに、暴力行動が肯定的に描かれている場合と否定的に描かれている場合とを区別した。少年雑誌にあつては、暴力行動についての評価基準は向秩序的であるか反秩序的であるかに左右されると考えられることから、前者については「向秩序型暴力」、後者については「反秩序型暴力」として大別できると考えた。

③ 暴力表象の4類型

以上を踏まえ、暴力行動の種類（直接的暴力／間接的暴力）と指向性（向秩序型暴力／反秩序型暴力）をクロスさせた結果、暴力表象については、「向秩序型直接的暴力」・「反秩序型直接的暴力」・「反秩序型間接的暴力」・「向秩序型間接的暴力」の4類型が得られた。

(4) 予想される少年像について

それぞれの暴力表象と親和的であると考えられるジャンル小説を仮定し、それぞれのジャンル小説にあらわれることが予想される少年像を設定した。

① 英雄少年

「冒険小説」の多くは、「冒険」としての直接的暴力を少年の社会化として容認する傾向にあると考えられることから、「向秩序型直接的暴力」と親和的であることが予想される。そこで、「冒険小説」において「向秩序型直接的暴力」を行使する少年像の理念型を「英雄少年」としてカテゴライズすることとした。

② 不良少年

「探偵小説」の多くは、犯罪行為が描かれていることから、「反秩序型直接的暴力」と親和的であることが予想される。そこで、「探偵小説」において「反秩序型直接的暴力」を

行使する少年像の理念型を「不良少年」としてカテゴライズすることとした。

③滑稽少年

「滑稽小説」の多くは、「笑い」としての間接的暴力を通して体制を相対化する傾向にあると考えられることから、「反秩序型間接的暴力」と親和的であることが予想される。そこで、「滑稽小説」において「反秩序型間接的暴力」を行使する少年像の理念型を「滑稽少年」としてカテゴライズすることとした。

④立身出世少年

「立志小説」の多くは、学歴資本の獲得を目指す点で向秩序的で、学歴資本の多寡による差別などの間接的暴力が描かれる傾向にあると考えられることから、「向秩序型間接的暴力」と親和的であることが予想される。そこで、「立志小説」において「向秩序型間接的暴力」を行使される少年像の理念型を「立身出世少年」としてカテゴライズすることとした。

上記の仮説の検証を通して、ジャンル小説に描かれたジェンダー形成の重層性およびその振幅を明らかにしたいと考えた。参考までに、少年像・ジャンル小説・暴力表象の類型の三者間の対応関係を【表1】に掲げる。

【表1】

少年像	ジャンル	暴力表象
英雄少年	冒険小説	向秩序型直接的暴力
不良少年	探偵小説	反秩序型直接的暴力
滑稽少年	滑稽小説	反秩序型間接的暴力
立身出世少年	立志小説	向秩序型間接的暴力

4. 研究成果

『日本少年』1巻1号(1906/1)から14巻14号(1919/12)まで(欠号のため1巻4号を除く)に掲載されたジャンル小説を収集し、検討対象とした。

(1)先行雑誌における「小説」の位相

『日本少年』を概観した結果、ジャンル小説として小説が細分化する前段階として、「小説」というジャンルそのものが少年雑誌に掲載されることの歴史的意味について考察する必要性が生じた。そこで、『日本少年』に先行する少年雑誌である『少年園』と『少年世界』における小説の運用の傾向を調査した。

①『少年園』における「小説」の位相

『少年園』において題名もしくは欄名に

「小説」という語が用いられた事例は2件のみであった。伝統的な文学や史伝などの掲載が目立つ。論説や読者投稿欄などで、小説有害論が見受けられることから、少年雑誌に「小説」を掲載することが必ずしも自明ではなかったことがうかがえる。

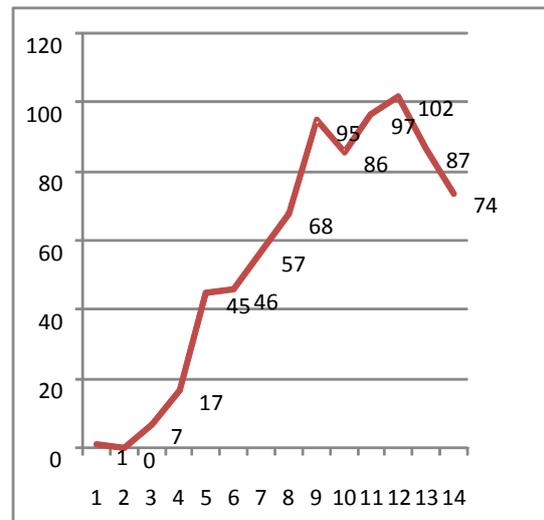
②『少年世界』における「小説」の位相

明治期の『少年世界』(1巻～19巻)において題名もしくは欄名に「小説」という語を含む事例を調査した結果、該当した事例は580件であった。その約60%が1巻から6巻までに集中していた。『少年園』と比して、『少年世界』が「小説」を重用した雑誌であることがうかがえるが、7巻から10巻までにほとんど「小説」が掲載されていないことや小説有害論が読者投稿欄に散見されることから『少年世界』における「小説」の地位は不安定であったと考えられる。

(2)『日本少年』における「小説」の位相

『日本少年』において題名もしくは欄名に「小説」という語が用いられた事例は782件であった。巻数別に件数を集計した結果は、【図1】の通りである。

【図1】



「小説」掲載数の変遷については、編集主筆の交替によって説明することができる。

初代主筆の星野水裏から2代目主筆の石塚月亭までの草創期(創刊～5巻2号)においては、小説の掲載件数自体が多くはない。

3代目主筆の瀧澤素水の時代(5巻3号～7巻14号)に小説の掲載件数が増加した結果、小説の細分化がジャンル小説として結実し、4代目主筆の有本芳水の時代(8巻1号～14巻9号)にはジャンル小説の確立をみたと考えられる。

以上の結果から、『日本少年』においても、

創刊当初は「小説」を掲載することが自明でなかったことがうかがえる。研究計画時点では想定していなかった結果であるものの、明治期のジャンル小説を検討する際の新たな知見を得ることができた。

(3) 『日本少年』におけるジャンル小説

①冒険小説

ジャンル名に「冒険」かつ「小説」という語を含む件数は94件であった。782件中占める割合は約12%である。

②探偵小説

ジャンル名に「探偵」かつ「小説」という語を含む件数20件であった。782件中占める割合は約3%である。ジャンルとして探偵小説とほぼ同じ運用がなされていたと考えられる怪奇小説の件数は45件であった。両者をあわせた件数は65件で、その割合は約8%となる。

③滑稽小説

ジャンル名に「滑稽」かつ「小説」という語を含む件数は81件であった。782件中占める割合は約10%である。

④立志小説

ジャンル名に「立志」かつ「小説」という語を含む件数は29件であった。782件中占める割合は約4%である。

⑤結果の考察

4つのジャンル小説のなかでは、冒険小説と滑稽小説が少なからず掲載されているのに比して、探偵小説と立志小説の掲載件数が少ないことが明らかとなった。

4つのジャンル小説の合計が269件で、782件中占める割合は約34%にすぎない。「少年小説」の件数が238件、「小説」のみの件数が27件であることなどを踏まえるならば、内容を明示していないと考えられる265件については今回の方法では検討できない。とりわけ、少年小説というジャンル名で立志小説的な物語内容を有する作品が少なからず見受けられることには注意が要される。また、「冒険奇譚」など、「小説」という語を含まないジャンル名が散見された。以上の結果は、ジャンル名を指標とすることの限界を示しており、今後の検討課題であるといえる。

(4) 暴力表象からみた少年像

ジャンル小説の内容分析については、現在取り組んでいる最中である。そこで、今回は各ジャンルで最も執筆していた作家を取り上げ、内容分析を試みる。

各ジャンルで最も執筆していた作家ならびに件数、各ジャンルに占める割合について

は、【表2】の通りの結果となった。なお、(3)で説明した理由により、探偵小説には怪奇小説を含めて集計した。

【表2】

ジャンル	作家名	件数(%)
冒険小説	三津木春影	21件(22)
探偵小説	永代静雄	24件(37)
滑稽小説	松山思水	55件(68)
立志小説	有本芳水	13件(45)

以上の結果を踏まえるとともに、読者に対する継続的な働きかけを考慮して、当該作家の作品のうち、シリーズ作品を検討対象とすることとした。

なお、(3)で指摘した理由から、有本芳水の少年小説で、唯一のシリーズ作品である「松前追分」を追加した。少年小説238件中、有本芳水の少年小説は54件を占め(23%)、最も多く少年小説を執筆した作家である。代表性という点に加え、少年小説の少年像の解明にもつながることから、追加することは妥当かつ有意義であると考えられる。

当該作家のシリーズ名ならびに連載回数については、【表3】の通りである。

【表3】

作家名	シリーズ名(連載回数)
三津木春影	地底の宝玉(12)
	少年海員(8)
永代静雄	少年博士(6)
	透視液(6)
	小公爵(6)
	地下宮殿(6)
松山思水	飛六兵六六六日記(12)
	大笑小学校(6)
	ヤンチャ倶楽部(6)
	喜劇アンボンタン座(8)
有本芳水	松前追分(7)
	いざさらば(12)

①冒険小説にみる少年像

「地底の宝玉」([作品①])と「少年海員」([作品②])の主人公の属性は、【表4】の通りである。

【表4】

作品番号	性別	年齢	学歴	孤児
[作品①]	男	18	商業学校卒	○
[作品②]	男	17	中学校在籍	○

主人公の属性としては、十代後半の男性で孤児である点が共通している。

暴力場面では、直接的暴力が数多く見受けられる。主人公に加えられる身体的暴力のみならず、主人公自らが身体的暴力を行使する

ことが少なくない。脅迫などの間接的暴力は直接的暴力に随伴する形であられることから、冒険小説の暴力行動は直接的暴力によって特徴付けられているといえる。これらの暴力場面は、挿絵を伴うケースが少なくなく、読者の印象に残ったものと思われる。

主人公の暴力行動は、【表5】に示したように、暴力が行使される主な対象が社会的逸脱者であることによって正当化されている。

【表5】

作品番号	性別	国	身分
[作品①]	男	日本	犯罪結社の首領
	男達	台湾	原住民
[作品②]	男	日本	造反者の首領
	男達	アジア	造反者

さらに、犯罪者側に与する東アジアの人々に対して、主人公側が暴力を行使する場面が少なからず見受けられた。このような傾向は、向秩序／反秩序の線引きをめぐる、ナショナリズムの関与を示唆していると考えられる。

たとえば、[作品①]では、「天照皇大神宮」の掛け声が窮地に陥った主人公の叔父を救ったり、発見した宝玉を政府に献納したりするなど、個人的な動機から始まった冒険が結果的に国家に貢献するという図式によって意味付けられている。

以上の結果から、冒険小説における理念型として、向秩序型直接的暴力を行使する英雄少年像が妥当であることが示唆された。

②探偵小説にみる少年像

「少年博士」([作品③])・「透視液」([作品④])・「小公爵」([作品⑤])・「地下宮殿」([作品⑥])の主人公の属性は、【表6】の通りである。

【表6】

作品番号	性別	年齢	学歴	孤児
[作品③]	男	17	大学卒	×
[作品④]	男	16	(書生)	○
[作品⑤]	男	16	不詳	○
[作品⑥]	男	17	不詳	×

主人公の属性としては、十代後半の男性である点が共通している。孤児が半数を占めるが、家庭環境には恵まれている。特徴的なことは、「理学博士」([作品③])・「公爵」([作品⑤])・「探偵長」([作品⑥])のような身分に支えられ、探偵行為が成立している点である。

暴力場面では、犯罪を扱っていることから、直接的暴力が中心に描かれ、挿絵として視覚化されている。

主人公の暴力行動が社会的逸脱者を対象としていることによって正当化されている

点は冒険小説と同様である。犯罪者の属性は、【表7】の通りである。

【表7】

作品番号	性別	国	身分
[作品③]	男女	独逸・米国	独探
[作品④]	男	日本・米国	犯罪結社
[作品⑤]	女	露西亜	犯罪結社の首領
	男達	日本	犯罪結社
[作品⑥]	男達	露西亜	犯罪結社
	少年	露西亜	孤児

犯罪者には日本人も含まれるが、首謀者は外国人である。女性と少年が含まれているが、ともに外国人である。裏を返せば、日本人の少年が犯罪者として描かれることはなかったことになる。

以上の結果から、探偵小説では、反秩序型直接的暴力を行使する不良少年像が日本人少年としては類型化されていないことが示唆された。

③滑稽小説にみる少年像

「飛六兵六六六日記」([作品⑦])・「大笑小学校」([作品⑧])・「ヤンチャ倶楽部」([作品⑨])・「喜劇アンボンタン座」([作品⑩])の主人公の属性は、【表8】の通りである。

【表8】

作品番号	性別	年齢	学歴	孤児
[作品⑦]	男	15	小学校在籍	×
[作品⑧]	男	不詳	小学校在籍	×
[作品⑨]	男	不詳	小学校在籍	×
[作品⑩]	男	不詳	小学校在籍	×

主人公の属性としては、小学校に在籍する児童である点が共通している。

暴力場面は、主人公たちの悪戯として描かれ、間接的暴力に直接的暴力が随伴することが多い。ただし、直接的暴力については、悪戯に対する体罰として現れることが少なくない。したがって、主人公は暴力行動の主体であると同時に客体であるといえる。

主人公の暴力行動の対象は多様であるが、【表9】の通り、教師や保護者などの大人に対する悪戯が散見される。

【表9】

作品番号	保護者	教師	その他
[作品⑦]	4/12	0/12	3/12
[作品⑧]	1/6	1/6	0/6
[作品⑨]	1/6	2/6	0/6
[作品⑩]	1/8	1/8	1/8

件数は多くはないものの、保護者や教師な

どの大人を対象とした悪戯が散見されることから、彼等の悪戯が秩序を壊乱する契機となっているといえる。

しかしながら、悪戯の結果、罰せられるケースがほとんどで、悪戯を契機に規範が再確認されるなど、秩序を補強するケースも見受けられた。また、同年代の子どもを対象とした悪戯のなかに、嘔吐きや金持ち、弱い者いじめをする者を懲らしめるなど、子ども集団の秩序回復を目的とした悪戯があることから、一概に反秩序的であるとはいえない。

以上の結果から、滑稽小説における理念型として、反秩序型間接的暴力を行使する滑稽少年像は部分的に妥当ではあるが、向秩序的暴力を行使するなど、その少年像の重層性が示唆された。

④立志小説にみる少年像

「松前追分」〔作品⑩〕と「いざさらば」〔作品⑫〕の主人公の属性は、下記の【表10】の通りである。

【表10】

作品番号	性別	年齢	学歴	孤児
[作品⑩]	男	不詳	小学校在籍	×
[作品⑫]	男	不詳	海軍兵学校	○

主人公の属性としては、男性であることに加え、家庭環境に恵まれない点が共通している。

[作品⑩]の主人公には家族があるが、没落し、しばらくは小学校に通うこともままならないような家庭環境で、勉強による立身出世を期待されている。

[作品⑫]の主人公は孤児ながら成績優秀で、中学校進学が叶わないため、家出をしたところ、亡き父の知人の援助を受け、中学校に編入し、首席で卒業後、海軍兵学校に合格している。海軍兵学校という傍系学校ルートによる立身出世物語であるといえる。

暴力場面では、主人公は暴力を被る対象であることが多い。[作品⑩]では、新参者の父親に対する侮蔑のことばとともに、同級生から石を投げられる。[作品⑫]では、中学校で特待生扱いの主人公を僻んだ同級生から鉄拳制裁を受ける。

主人公の境遇が差別やいじめなどの暴力行動を誘発しており、直接的暴力を伴うものの、心理的暴力に焦点化されていることから、間接的暴力によって特徴付けられているといえる。これらの暴力場面に挿絵があることは、他のジャンル小説と同様である。

主人公に加えられる暴力行動は、地域共同体〔作品⑩〕や学級集団〔作品⑫〕の秩序の維持を目的に、主人公を疎外しているといえる。

以上の結果から、立志小説における理念型

として、向秩序型間接的暴力を行使される立身出世少年像が妥当であることが示唆された。

(5)今後の課題

ジャンル小説については、内容分析の件数を増やし、今回の結果を検証することがあげられる。

なお、読者関連記事については、資料の収集に留まった。ジャンル小説の分析結果について、読者論的観点から考察を加えることとしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計2件)

① 目黒強、『少年世界』における「小説」の生成過程について、『少年世界』研究会、2008年5月11日、大阪国際児童文学館

② 目黒強、『少年世界』における「小説」言説の検討、『少年世界』研究会、2009年3月15日、大阪国際児童文学館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

目黒 強(MEGURO TSUYOSHI)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究所・准教授

研究者番号：70346229

(2) 研究分担者

特になし

(3) 連携研究者

特になし